

シリーズ

# 名演探訪 ～日本の合唱

## 3 「柳河風俗詩」

早川 功

令和5年(2023)2月28日

click [Isao Hayakawa 集まれ合唱!](#)  
facebook公開グループ「集まれ合唱!」  
に連載したものをまとめました

戦後の日本の合唱運動が先ず男声合唱によって発展してきたことは世界的に見てやはり特異なことでした。それは明治以来の旧制高校、大学が男子の為の存在であり、芸術というより精神高揚のための合唱が学生達によって培われていた土台があったわけで、戦後の合唱の普及にはその流れを汲まざるを得ないという事情がありました。

作曲家にとっても合唱作品を作ると言うことは男声合唱曲を作ると言うこととイコールであった時代があったのです。清水脩は「月光とピエロ」の成功により、その道の第一人者となりましたが、その後を追ったのが多田武彦でした。

旧制大阪高校、京都大学で合唱指揮にのめり込んでいた多田は在学中に清水の知遇を得、作曲に興味を持ちました。しかし専門の音楽教育を受けることなく、彼は大学卒業後大手銀行に就職します。ただ彼の独特の作曲の感性を認めていた清水の勧めにより、アマチュアながら作曲活動を始めることになります。そうして1954年、多田氏24歳の時に生まれたのが処女作である組曲「柳河風俗詩」でした。

詩情あふれる北原白秋の詩につけられた4曲の新鮮さと通俗性。その価値をいち早く見抜き、演奏に取り入れたのはやはり福永陽一郎率いる東京コラリアーズだったのです。後の世で多田作品が男声合唱界を席卷するわけですが、その萌芽はこの時代にありました。東コラ消滅後、福永は同志社、畑中良輔は慶応、そして北村協一は関学のそれぞれの男声合唱団の指揮者となり、多田に多くの作品を委嘱することで貴重な男声合唱のレパートリーが増えていったわけです。

紹介するのは1990年6月の東西四大学合唱連盟演奏会で、関西学院グリークラブが演奏した「柳河風俗詩」のライブ映像。指揮は北村協一。

この年の2月に合唱界を牽引し続けていた福永先生が亡くなり、一つの時代が終わって初めての「福永抜きの四連」がどうなるのか。私は早稲田グリーの伴奏で出演したピアニストの久邇之宣氏に入場券を頼み、大阪フェスティバルホールまで聴きに行ったものです。そして出会ったこの北村・関学の「柳河」。この直前私自身は混声版の「柳河」を東京とハンガリーで振っていました。その時の参考にしていただいていたのがかつてこのコンビで録音されていた

レコードであったこともあって興味深く聴いたのですが、圧倒され、感動させられました。この時の関学が持っていた声と言葉の表現力はもうどこからも聴くことのできないほどの完成度だったと思います。

この時代のこのコンビでしか味わえない空前絶後の「柳河」。

男声合唱組曲「柳河風俗詩」  
 作詩：北原白秋  
 作曲：多田武彦  
 指揮：北村協一  
 合唱：関西学院グリークラブ



<https://www.youtube.com/watch?v=2-032zD254Q>

### 【シリーズ バックナンバー】

- 1 男声合唱組曲「枯れ木と太陽の歌」
- 2 男声合唱組曲「月光とピエロ」
- 3 男声合唱組曲「柳河風俗詩」
- 4 女声合唱組曲「美しい訣れの朝」
- 5 女声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」
- 6 混声合唱組曲「嫁ぐ娘に」
- 7 混声合唱、ヴィブラフォン、ピアノのための「動物の受難」
- 8 混声合唱組曲「島よ」
- 9 男声合唱組曲「水のいのち」
- 10 男声合唱のためのカンタータ「土の歌」

Back

音楽・合唱TOPへ

Home

HOME PAGEへ